

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所
第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことは
を掲載します。

すべてがわが応援団などというところ、「そんなことはない。
あれは自分の敵で、この前も皆の前で悪口雑言、よほど張
り倒してやろうかと思っただけだ」とか、「痔がいたむ、
持病なのだ。永年憎んできた。追放するのがあたりまえだ。
味方なものか」などと反論されるかもしれない。

ものは考えようだともいう。しかし勝手に考えようとい
うだけのものではなく、悩みに悩み、苦しみに苦しんだあげ
くの果てに、これだ！と五臓六腑にしみわたるほどの喜び
をもって、悟られた真理なのである。

持病とは、これ以上行きすぎがないように、また危険に
さらされることのないように気をつけよ、と注意してくれ
る応援者なのである。痔にかぎらず、神経痛でも、内臓の
故障でも何でもそうなのだ。病気は一般に個人あるいは社
会のゆがみやひずみの象徴なのである。しかも持病は永年
その人のもっている生活の不自然なところを、その人にふ
さわしく現わしている。

だから病気をきらい、あせって直そうとふんばり、よけ
いぐあいを悪くするよりも、よりよい立ち直りのためにも
病気によって教えられるところを、よき忠告として受けい
れ「ありがとう、しっかりとやるよ」とはりきって暮らすの
が賢い生き方である。



8月のテーマ

困ったことから
開ける道

すべてがわが応援団

丸山竹秋

悪口をいわれ、罵られたりすると、腹もたち不愉快にも
なるだろう。しかし落ちついて考えてみよう。その悪口が
ぴったりに当たっているのなら、それこそ反省し、改めてい
けばよいではないか。

激励してくれているのが悪口であり、非難攻撃なのであ
る。その非難が当たっていないければ、「それはちがう。し
かしそう見えるところもあるかもしれない。今後はそうし
ないようにいっそう気をつけるから、応援のほうはよろし
く頼む」とでもこたえて、勇んで仕事に取り組むことだ。
人生にいやな人、困った問題などなければよいと思いが
ちだが、しかしよく考えてみると、そうした人があり、問
題があればこそ、もっとしっかりとやろうと決意もする。

そしてさまざまの工夫も凝らし、知恵もしぼるからこそ
生活に張りが出、人生もおもしろくなってくるのではない
か。試合で強敵もいず、いつでも楽々と勝てるようなゲー
ムばかりでは、さっぱりおもしろくあるまい。人生でも同
様だ。試合にもルールがあるように、人生にも大小さまざま
まのルールがあるのである。民族によって憲法とか法律と
かは異なるのであるが、しかし全人類に共通している徳福
一致の倫理こそは、不変絶対のルールにはかならない。
これにのっとってしっかりとやっていくとき、自分を困ら
せるように見えることごとくは、じつはこよなき味方であ
り応援団なのであって「フレーフレー、負けるなよ」とけ
んめいに激励してくれているものなのである。

『つねに活路あり』より